

防衛施設庁史編さん体制等

編さん体制

編さん委員会

委員長	北原巖男（長官）
委員	地引良幸（次長）、富永洋（技術審議官）、長岡憲宗、新保雅俊（総務部長〈事務局長〉）、渡部厚（施設部長）、千田彰（建設部長）、伊藤盛夫（業務部長）
事務局	大東隆（総務課長〈事務局次長〉）、辻秀夫（人事課長）、竜寄哲（会計課長）、辰巳昌良（施設企画課長）、田中聡（建設企画課長）、南博之（業務企画課長）、野口裕樹（広報調査室長）

編さん員

【編さん総括チーム】

高橋晃、緒方康人、岡田英之、上田功二、秋田幹雄、渡辺信一郎、中川武雄

【各部課等作業チーム】

（総務部）

古澤富士夫、荒井喜之、見村均、笠井正重、羽田野明子、三浦正典、玉榮一邦、友川一幸、山本義光、早川亮一、諸井隆慶、竹林修、吉田弘之

（施設部）

藤代誠、伊藤賢、榮森賢、上楽重治、杉澤健生、稲嶺盛敏、北原由尚、齊藤久雄、林隆弘、中島哲士、藤井雷太、藤井真、小下正浩、柚木秀一、柏木実、平林正彦、丹部将樹、石崎孝典、松田知子、渡橋義博、三沢大輔、木下恵介、伊波勇、梅本金男、有賀元宏、栗原由香

（建設部）

早坂茂紀、石倉三良、田中貴典、原田全通、澤村貴之、村越信雄、宇都宮隆、遠藤宗秀、菅原直孝、丸尾政道、渡辺和裕、鶴田郁夫、西山大策、亀川芳三、根本貴由

（業務部）

小澤正男、紺谷林宏、東深澤真一、一條雄介、牧迫俊明、高木誠治、坪川弘、田中順也、針貝雅喜、高橋秀夫、橋本賢二、泉秀雄

（訟務室）

今野了彦、牧野浩士、戎森健二、折原久也

監修者の方々からの一言



松本 宗和氏
元防衛施設庁長官

防衛施設庁史の編纂に際して監修を依頼されたことから、改めて防衛施設庁の足跡を順序立てて振り返る機会に恵まれた。この庁史は、5年ごとに区切られた各期間を特色づけた数件の大きな事件を記述することで45年間の歴史を振り返り、防衛施設庁がかつて特別調達庁として占領軍の調達要求に応える仕事から始めて、日米安保体制下のあらゆる防衛施設関係問題を、その施設を抱える地域との調和を図りながら処理することで我が国の安全保障に大きく寄与してきた特異な状況を記録にとどめ、今後新しい体制に移って業務を進める上での参考の資ともしようとするものである。その線に沿って作業は非常に緻密に行われ、短期間の作業にもかかわらず、事案発生当時の記録や証言を広く求めて正確によくまとめられている。一種派手な話題を呼んだ案件を追って、防衛施設庁の歩みと基地問題の推移を手際よく掴むことが出来る。編集に携わられた皆さんには敬意を表したい。

ただここで一言。この庁史に紹介はされていないものの、関わった人数の上でも、採り上げられた案件に直接携わった職員よりはるかに多くの人々が、全国の防衛施設が所在する地域で日夜コツコツと困難な問題に取り組み解決に当たっていた膨大な案件が、編集の都合で割愛されている。その1件1件が防衛施設庁と防衛施設行政を語る貴重な要素であり、それらに関わるものも、当然ながら何らかの形で保存されなければ、歴史として華々しくまとめられた大きい案件の影に消えて行ってしまう。例えば東富士演習場の使用転換問題は基本的に重要でまた大きな問題であることは当然のことである。他方、同演習場であの頃取り組まれた陸上自衛隊の30Rロケットのたった7発の試射実現。これに割かれた大きなエネルギーが、基地問題の在り様を語るという点で大変印象深く思い起こすことのできる案件の一つである。等々……。歴史書を編纂する過程で常に起こりえることであると思う。監修の資として何回か送られてきた分厚い原稿を読みながら、しきりに脳裏に去来した事柄である。



古賀 速雄氏
元防衛施設庁次長

岩本町の特別調達庁時代から勤務した私にとって、防衛施設庁が消えさることになったのは、諸兄同様痛恨の極みであります。しかし「庁史」を編纂、完成に至ったことは大変よろこばしいことです。この六十年間防衛施設庁がいかに地道に、時には文字通り身をけずる努力を重ね、米軍（タフ・ネゴシエーターそのものであった）との折衝、基地周辺の住民の方々との交渉、補償の実行等々の業務をつづけて来たかを、後世に知らしめる上で「庁史」の力は大きいと信じます。私は療養中でもあり、監修者としては、殆ど何の力にもなれなかったことを不甲斐なく思うとともに、私よりはるかに若い世代の現職の方達の「庁史」を残そうという愛庁のこころざしと、編輯に当たっての並々ならぬ努力に、心からの敬意を表し、感謝いたしますのみであります。



梅岡 弘氏
元防衛施設庁次長

「仕事は人を造り、その人が仕事を啓く。」防衛施設庁史（校正刷）を読んで、こんな言葉が浮かびました。庁史には、45年にわたる防衛施設庁の仕事振りが濃縮されており、その仕事に取組んだ人たちの息使いが感じられます。

これまで防衛施設庁が担ってきた、わが国の安全保障・防衛政策の確実な遂行を国民社会の民生安定から支えるという行政課題の追求は、いつも不変であり、今回の防衛庁の組織大改編の眼目もこれをより積極化することにあります。

その意味で、この庁史は、防衛施設庁の墓碑銘でなく、元施設庁人が新組織に携行する家傳書になるのではないのでしょうか。



大原 重信氏
元防衛施設庁次長

監修に当り、先輩方の業績を改めて辿りながら、戦後およそ60年にわたり、これほどの広範囲かつ多様、困難な事案をよくもよくも処理解決して来られたものと、幾重にも心打たれ幾度となく筆を止めた。

苦渋の中でご協力をいただいた地元の行政の方々、地元関係住民の方々、ご指導ご鞭撻をいただいた地元選出国会議員の先生方、また広く多くの先生方、そして日夜心血を注いでこられた防衛施設庁の先輩を始め、名も無き我等の仲間達の足跡がここに示されている。

基地行政とは如何なるものか、容易には定義し難いにしても、ここに一つの体系として形造られ、確立されて厳存している。

今般の官製談合事件は、施設の建設その他の部内工事にかかわる事であって、いわゆる基地行政とは関係ない。しかしながら、この不祥事を契機として、防衛施設庁そのものが解体され、基地行政は中心軸を失い、改革再編の声の中で分散、埋没して行くこととなった。事に当って、または日常的に、それぞれの基地問題の担当者が一つの有機体となって大きな力を発揮して見せることはもう無い。

いま、監修の任を終えて、私はこの終焉を茫然と見つめている。



朝隈 修氏
元防衛施設庁技術審議官

昭和28年7月、半世紀を超す54年前の暑い夏の朝、私は東京深川越中島にある保安庁の庁舎の門をくぐった。新生日本の安全と平和を守るという高い使命感に胸をふくらませ、力をこめて宣誓したのは、警察予備隊が発足してから三年目の保安庁中央建設部。鉄骨むき出しで天井の高い旧ボイラー室が私共の執務室だった。配属されたのは、計画課基準班で、班長が山本三等保安正（現在の三等陸佐）、班員は私一人で保安隊施設の建築に関する基準の作成が主な仕事だった。当初は建設工事の全てが建設省に委託されていたが昭和29年度から徐々に切り換えられ、遠からず全て直轄実施することとなった。執務は相変わらず旧ボイラー室で、雨の日は高い窓から容赦なく吹きこむ雨水に窓際に並んだ製図板が濡れるのを防ぐため、傘をさしかけて作業をしたのも笑えない思い出の一コマである。あれから霞ヶ関を経て、六本木に落ち着き、昭和60年末に退官するまでの32年間、ひたむきに国を愛し、組織を愛し、全力投球を続けた自信と誇りは、終生忘れ得ぬ尊い私の財産である。



西村 宣昭氏
元防衛施設庁労務部長

調達庁・防衛施設庁には、米軍関係では地方にも大小様々の問題が切れまなくあった。例えば、基地返還要求・施設が集約される地元の苦情、提供地所有者等との交渉、米軍兵士の不法行為に対する苦情・補償、騒音苦情への対処、基地従業員の人員整理にかかる労使交渉などなど。自衛隊の施設整備についても騒音軽減のための滑走路移動等各種の問題があった。これらの処理に、先輩や同僚が時に罵声を浴びつつ地道に日夜努力された姿は忘れられない。その苦労は本書の行間で読み取って頂くしかないと思うが。

防衛施設庁が担った業務は、他律的に生起し、現地で反対されるという側面を多分に持っている。処理の困難さは、沖縄の基地問題を抱えてさらに倍加したようにも思う。

現職の方々のご健闘を祈る。



萩野 貴一氏
元防衛医科大学校副校長、
元防衛施設庁労務部長

昨年11月、防衛施設庁史の監修の依頼を受けた際に、刊行予定時期は本年7月中が目途だと聞き、その実現の可能性に危惧を抱きました。

と申しますのは、私事になりますが、33年余りの公務員生活のうち約半分の16年余りを課長や総括補佐の時期を含めて防衛施設庁総務課で企画・法規の仕事に従事し、この間何回か庁史編纂を試みながら、日常の職務の遂行に追われてなかなか原稿ができず失敗した経験があったからです。

ところが、本年1月に現業各部課から集まった原稿を事前に送ってもらったところ、想像していたよりもはるかにできの良い原稿に接し驚きました。現在、現業各部課は緊急に処理しなければならない業務を多く抱えており、しかも、その一つ一つが政治問題化し複雑化していてとても庁史にかかざらう余裕なんかないに違いないのに、それぞれの項目の記述がほぼ編集の方針に適っているのに感心するとともに、この原稿を見て期限までの完成を確信しました。

私は、現役時代に庁史編纂をサポートしていた罪滅ぼしと、総務課16年余りの勤務で得た経験と知識をたとえ微々たるものでも役立てたいという気持ちで、監修員というよりも、編集員のお手伝いとしての立場で、草稿の段階から合計5回、目を通させていただき、意見も述べさせていただきましたが、毎回新鮮な気持ちで違った角度から楽しく読ませていただきました。

出来上がった防衛施設庁史は、同庁が処理してきた主要な基地問題を網羅しており、それぞれの項目についても背景・経緯、問題となった事柄、処理の経過と結果について最小限のものが記述されており、防衛施設庁がその処理を通じて蓄積した成果の主なもの表現したものであります。本書の編纂により基地問題の処理を集大成した防衛施設庁史を編纂するという目的をほぼ達成したものと言えると思います。また、本書は、短期間のうちに、古くは40数年前（占領期間のものを加えると60数年前）の過去の資料を探し、バラバラになっている資料を整理してまとめたものとしては、最善のものであると思われます。

最後に、本書が防衛施設庁から基地問題を担当する新しい組織への引継書として、また、国民全体の安全、福祉、衛生等のために必要だが地域住民にとっては負担になるような施設の設置について住民との調和を図る施策の参考書として活用されることを期待するものであります。

本書の編纂に当たった現役の職員の皆様、本当にご苦勞様でした。



染葉 忠之氏
元防衛施設庁次長

第一次稿、第二次稿と、しだいに完成度を高めていく「防衛施設庁史」の草稿を、編さん員の方々の努力の跡を感じながら順次読み進めていく中、現役時代に自分も携わった米軍労務費の負担問題や基地労働者の大量解雇問題などが記述された部分に及ぶと、頭の中はタイムスリップし、苦勞した当時の思い出に浸ってしまうこともしばしばでした。そんな懐しさも加わり、監修の作業は、けっこう楽しいものでした。監修の役割が十分に果たせたかどうかはともかくとして、今回の「防衛施設庁史」は基地行政45年の通史として、多くの読者、関係者の関心と期待に十分に答え得るものであると確信しています。



故長坂 強氏
元防衛施設庁次長

特別調達庁・調達庁・防衛施設庁を通じて、つねに先駆的であり大きい業績を残された方に、大石孝章さん、沼尻元一さん、高坂清三郎さん、鈴木昇さんをはじめ多くの方々がおられた。もちろん、長坂強さんもその一人であるが、惜しいことにこの庁史の監修者のひとりとして完成をみることなく去る2月26日物故された。

この度の防衛施設庁の組織解体と全省規模での組織再編に際して、長坂さんは、防衛施設庁の建設工事をめぐる事件の非違を率直に認められたが、他面、複雑・困難な防衛施設行政遂行の根底に防衛施設庁の業務をめぐる内外の強く長い実績で築かれた信頼関係があることから、急激な組織改編によってその信頼関係（愛と志）が崩れることを深く憂慮された。長坂さんの生前の最後の公の行動は、このことを防衛本庁（省）と防衛施設庁の要路者に繰り返し衷心から訴えることであった。（梅岡 弘 記）

編さん後記（編さん総括チームの一言）

「防衛施設庁史を作れないか」との話が北原防衛施設庁長官からあったのは、私が本庁総務課長に着任した1週間後のことでした。防衛施設庁マンとして社会人の第一歩を踏み出し、ここまで自分を育ててくれた防衛施設庁というひとつの役所がこの世からなくなってしまうということ。そのことがもつ意味を考え直すとともに、この役所が我々に残したものを一つ一つ掘り起こし、整理し、そしてまとめ上げることは、あるいはこの時期にこの場に居合わせた我々の責務なのではないか。そのようなことを考えつつ、総務課の面々と議論を重ねながら約1年。今ようやく防衛施設庁45年間の歴史が1冊の本となりました。一口に45年間の歴史といっても、この防衛施設庁史に刻み込まれた一つ一つの基地問題の足跡は、まさに諸先輩の闘いの歴史であります。「時間はかかったかもしれないが必ずやり遂げてきた」という「土民軍」魂をそこに見出したとき、我々現職も今その同じ道を歩んでいるのだということを誇らしく感じるのは私だけではないと思います。

業務多忙中、この防衛施設庁史編さんに携わっていただいた各部各課60余名の編さん員の方々、とりわけ1年間という短期間に全体の取りまとめを精力的に行ってくれた総務課の総括チームの面々、そしてそのしわ寄せをまともに受けた総務課のその他の人達に心から感謝します。（大東 隆）

採用（昭和61年春）の翌年の夏内局に出向し、16年ぶり（平成15年夏）施設庁に戻った。その3年後（平成18年）、「事件」をきっかけとしてあつという間に施設庁の廃止・統合が決まり、『庁史』が編さんされることとなった。

採用時、私の机の斜め前には『庁史』編さんを担当されるベテランの専門官の席があり、この専門官が関係部課と調整しつつ、日々膨大な量の文書と格闘される姿を見て「大変な仕事だ」と密かに思っていた。このような私が『庁史』編さんを担当するよう命ぜられた。運命だと思った。

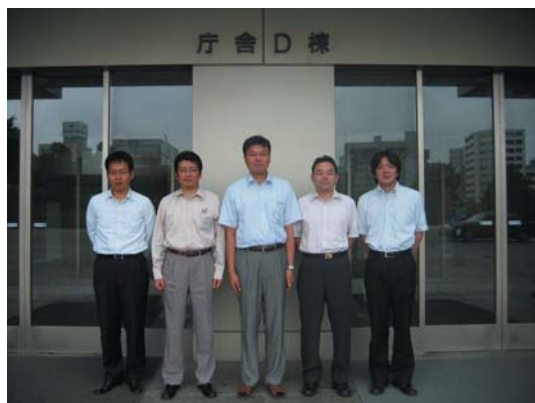
常々「基地問題」とは多くの関係者からなる人間ドラマだと考えていた。したがって、『庁史』は、「基地問題」のアクターである施設庁・地元等の関係者が何を考え、どのような行動を実際にとったか、を中心に記述すべきだと思った。この考えから、実際に「基地問題」の渦中におられた庁内外の方々の生の声（手記）も可能な限り掲載させていただこうと思った。『庁史』がこの人間ドラマをキチンと記録したものとなったか、今は判断はつかない。

平成19年に入ってもなお作業が遅々とする中、監修者のお一人でもあるかつての上司が「原稿が出来次第送ってきなさい。監修者としてでなく君のお手伝いとして見るよ。」と申し出て下さり、何度も何度も役所まで足を運んでいただいた上に、多くの貴重なコメントをいただいた。

このようなご協力を得つつ、我々の狭い会議室（当直室）での作業は続いた。この間、私の一番の相談相手は、ホコリをかぶった資料、セピア色に変色した写真、そして「原稿の中で地元調整などに奔走する幾多の先輩方」だった。私の素朴な疑問に対して、資料が、写真が、文中の先輩方が、時には笑いながら、時には厳しい表情で答えを返してくれた。しかし、ただ一つ「現在の施設庁は防衛施設庁なのか」という問いには最後まで答えはなかった。対話から得た多くの示唆、叱責、そして少しばかりのお褒めは全て『庁史』に凝縮した。この『庁史』が現役・退役双方の「土民軍」の心の糧として愛読されるならば、これ以上の喜びはない。（高橋 晃）

公務員生活のほとんどを防衛施設庁で過ごした私に、突如として施設庁が無くなることについては、やはり驚きと悲しみは隠せませんでした。私にとっての防衛施設庁は、社会人としての親みたいなのでもあります。防衛施設庁に採用され、社会人のイロハを教わり、そして現在の私が今ここに存在していると思っております。

その防衛施設庁が解体・統合に向け、最後の防衛施設庁職員として、「防衛施設庁史」の作成という大きな仕事に携わらせていただけたのは、私自身にとって大きな幸せでした。しかし、庁史作成の意志決定から刊行までの期間がかなり短く、本当に刊行が可能か常に不安を抱いた状態での作業となりました。ところが、いざ作業が始まりますと施設庁関係職員が一丸となって取り組み、ここに「防衛施設庁史」の完成を見ることができ、安心感と充実感と防衛施設庁に対し自分なりに恩返しが少しできたと思います。



最後に、「防衛施設庁史」の作成に携わった関係職員の皆様、本当にお疲れ様でした。編さん総括チームの皆様、いろいろご迷惑をお掛けしたものと存じますが、本当に有難うございました。また、これまで自分を育ててくれた防衛施設庁に対して心から有難う。そして、45年間、本当にお疲れ様でした。私どもはこれからも形を変えて施設行政に邁進していく所存です。（緒方 康人）

平成18年1月、施設庁における談合事案が生起し、早々に防衛施設庁の廃止が伝えられました。その後、施設庁の廃止、「内局」への統合が現実味を帯びてくるにつれ、施設庁に思い入れのある先輩職員などからは、『土民軍』の仕事の内局にできるのか」となどという声も聞かれました。

そのような中、施設庁最後にして「庁史」を編さんするという話が10月になって持ち上がり、その編さん員として肩を叩かれました。

庁史の編さん作業は、思いのほか手間を要するもので、通常業務もあいまって、なかなか捗らない、連日深夜に及ぶ作業に、イライラする日が続きました。それでも、総務課という「調整」が主な仕事である部署にあって、施設庁の歴史に触れるとともに、「ものづくり」に携わることができたことは、ある意味ラッキーなことだったのかもしれない。

この庁史は、施設庁の担当者らが「これだけは」という、これまでの重要な事案が厳選して記述されており、今後の「『土民軍』の仕事」の「要石」のような役割を果たすものだと思います。この「要石」の作成に微力ながら携わることができたことは、私にとって貴重な経験だったのかなとも思っています。そして、せっかくだから子供に見せて「施設庁」を自慢しようと思っています。

最後に、この庁史の編さんに当たっては、様々な方々にご迷惑をおかけし、また、ご協力をいただきました。この場を借りてお詫びと感謝を申し上げます。(岡田 英二)



昨年10月、北原長官から庁史編さん員の指名書をいただいたときには、自分にそんな大役が務まるのか不安でしたが、色々にご迷惑をお掛けしながらも高橋補佐をはじめとする庁史編さん総括チームの一員として、少しは防衛施設庁史編さんの役に立てたのではと思っています。

短期間での編さん作業は大変でしたが、編さんの過程において、諸先輩の方々から貴重なお話しをお伺いできたことや、昔の資料と格闘したりしたことで、過去45年の間に防衛施設庁が行ってきた施策や基地問題への対応などを肌で感じる事ができたのは、自分にとって貴重な経験となりました。防衛施設庁は防衛省へ統合されますが、防衛施設庁の全てが詰まった『防衛施設庁史』の編さんに、最後の『防衛施設庁職員』として携わることができ、とても光栄でした。

最後になってしまいましたが、防衛施設庁史の編さんにご協力いただいた全ての方々に感謝いたします。ありがとうございました。(上田 功二)

上司より「庁史」編さん総括チーム員指名の話を聞いたとき、正直なところ「採用されてからまだ間もない自分に務まるのだろうか」という不安でいっぱいになったことを覚えています。

当初はいやな予感がしつつも「まあ何とかなるだろう」などと高をくくっていたのが、気がつくや連日深夜に及ぶ校正作業に突入しており、他の業務と兼務していたはずが「庁史」編さん作業に専従せざるを得なくなっていました。

辛いことも多々ありましたが、完成した庁史を目にすると、これが自分にとって初めての「形に残る仕事」となったのだという実感が湧いてきました。

また、入庁間もない自分にとって、施設庁45年の歴史を（浅く広くかもしれませんが）識ることができたのは意義深く、今後の業務の糧となることと思います。

最後に、自分が庁史に専従してしまったため、実質1人で当系の業務をこなされた秋田主任、無茶なスケジュールに最後までお付き合いいただいた各作業チーム員の皆様に心より感謝します。

ありがとうございました。(渡辺 信一郎)

この度、防衛施設庁史編さんという重要な業務に携わることができたことは、大変光栄なことである反面、その責任を重く感じる事となりました。特に、防衛施設庁長官から直接、指名書の交付を受けたときなどは、気持ちが引き締まる思いでした。

私は、入庁して7年目（今は8年目）でありましたが、未だ携わったことのない業務も多く、45年という当庁の歴史をまとめるという業務に相応しいのかと感じるときもありました。

しかし、庁史編さんという業務を通じて、恥ずかしながら、当庁について新たに知ることや諸先輩方の努力等、当庁の歴史に少しではありますが触れることができ、自分自身もさらに今の業務を頑張らなくてはならないという気持ちが沸いてきました。

実際には、私自身、庁史編さんという業務の中で、多くの失敗もありましたが、多くの方々からご協力をいただき、短い期間ではありますが努めることができました。

最後に、日々の業務で大変な中、多くのご協力をいただいた職員の方々、また、諸先輩の方々に感謝し、最後の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。(中川 武雄)